



焼玉エンジンを動か
し、ポンポンという排
気音を確認する宇和島
水産高生ら

大正一昭和期に漁船などの動力として使われた「焼玉（やきだま）エンジン」。宇和島水産高校（宇和島市明倫町1丁目）に眠っていた63年前のエンジンが海洋技術科海洋工学コース3年生の手で、3年をかけて復活した。このほど同校でお披露目会があり「ポンポン」という独特の大きな排気音を響かせた。

復活 ポンポン 焼玉エンジン

焼玉エンジンはエンジン上部の燃焼室にある焼玉と呼ばれる鉄の塊を加熱し、燃料を吹き付けることで燃焼させる。同校によると、明治末期にヨーロッパから輸入された国内メーカーがこぞで製造するようだった。日本の動力漁船は焼玉エンジンの普及によって発達した。アイゼルエンジンの台頭で今はほぼ姿を消しているが、同校には徳島県の鉄工所が製作し宇和島の巻き漁船に使われた1957年製の1機が存在。入手経緯は不明で設置後に動いたという記録はない。同コース3年生の課題研究のテーマとして修理することになった。

1957年製漁船動力 生徒ら3年かけて修理

宇和島水産高でお披露目会

り、2017年4月から活動を始めた。

焼玉エンジンの復元などに取り組む高知県のNPO法人「第2次産業遺産研究会」の森下泰伸さん（同県大豊町）と山本弘明さん（四子市三浦町）が手ほどきし、3年間学校に足を運んで生徒と汗を流した。宇和島市内の複数企業もエンジンの土台製作や排気管の助言などで協力した。

同校のエンジンは戦後の混乱期に製造されている。同じ箇所でもボルトやナットの種類が異なることなどから、作業は困難を極めた。

使い物にならなかったり欠けていたりする部品は一つ一つ作り直す必要があり、工程は全く計画通りに進まなかった。それでも歴代の生徒が確実に進めて最終に引き継ぎ、今年の3年生8人が9月、復活を成し遂げた。お披露目会は、お世話



焼玉が加熱されるエンジンの燃焼室



63年前の焼玉エンジン(中央)を復活させた宇和島水産高生ら

になった人らを招いて美濃 生徒は森下さん、山本さんが興味深く聞き入った。初めは「これを動かすのはかなり大変だ」と思っていたという森下さんは、「生徒が非常にやる気を出して取り組んでくれ、船に載せても大丈夫なくらい物になった」と目を細めた。

田中恭孝さん(17)は「焼玉の音が聞けてすごくうれしい。慎重な作業が必要で大変だったけど、周りの方が助けてくれたおかげ」と笑顔で感謝。「口癖はディーズル機関の勉強をしているが、今回修理して昔のエンジンはよく考えられているなと感心した」と、先人の発想力に刺激を受けていた。

(中田 佐知子)